

秋のインディアナ — CESS 大会参加記—

小松久男

2004年の10月、私はCentral Eurasian Studies Society (CESS)の第5回目となる年次大会に参加する機会をえた。以下にそのときの見聞を記してみたい。今回の会場は、かねてから内陸アジア史研究で名高いインディアナ大学だった。到着したころはまだかすかに夏の名残が感じられたが、大会が終わる頃にはすっかり秋色が濃厚となっていた。リスも駆けるキャンパスは広大だが、大会はIndiana Memorial Unionが運営する会議場・ホテル一体のスペースでスムーズに行われた。昨年のハーバードでの大会に比べると、参加者は約半分で、中央アジアやヨーロッパ諸国からの参加者は少なかつたように見えるが、それでも全体では400人ほどの参加者を数えたのではないだろうか。大会は、10月14日夕方の歓迎レセプションで始まり、翌15日から二日半の間に合わせて57のセッションが開かれた。その内訳は、分野別で言うと、経済(EC:4)、歴史(HC:16)、政治(PO:17)、社会(SO:20)であった。

HC-06 Constructing a Soviet Central Asian Biography

Michael Rouland, "Confronting a Paradigm: Mukhtar Auezov as Soviet Intellectual"

Daniel E. Schafer, "Abdulkhai Kurbangaliev: The Peculiar Life of a Bashkir Counterrevolutionary"

このセッションでは、ソビエト期中央アジアの知識人の伝記が、タジキスタン、カザフスタン、バシコルトスタンを事例に扱うことになっており、期待して出席したのだが、タジク作家として著名なアイニーの自伝(『回想録』)を論じる予定のPerry教授が欠席したため、2本だけの報告となった。Rouland報告は、ロシア・ソ連知識人論の観点からアウエゾフにアプローチする試みだが、アウエゾフ個人よりは一般論に終始した感がある。Schafer報告は、ロシア革命後の内戦期にバシキール自治の将来像(地域的自治ではなく民族文化的自治)や土地問題でゼキ・ヴァリドフ(トガン)らと鋭く対立した「反革命派」クルバンガリエフの活動をほぼ3本分の時間を使って説明した。後で報告者に聞くと、西山克典氏のロシア語の論文は参照しているとのことだったが、ロシア語以外の史料はまだこれからのようである。革命以後の人物の伝記や自

伝を比較研究するとすれば、トガンの有名な『回想録』も興味深い事例を提供するだろう。なお、翌日のセッションでは、現在島根県立大学大学院に留学中の Larisa Usmanova さんが、このクルバンガリエフを含めて Russian Tatar Emigre Communities in East Asia in the First Half of the 20th Century と題する報告を行ったが、私は同時間帯に自分の報告があったために、聞く機会を得なかった。満州や日本への亡命ムスリムについては日本側の史料の開拓が必要であり、日本人研究者の仕事が多いに期待される場所である。これは中央ユーラシア史であるとともに日本史の研究でもある。

HC-03 Oral History and Collectivization in Uzbekistan

Shaxnoza Gayupova, “Recovering Spiritual Outlooks and Knowledge in Ferghana”

Marianne Kamp, “Images of Private Property in Uzbek Oral Histories of Collectivization”

Elyor Karimov, “Oral History and Written Sources of Khorazm at the Beginning of the 20th Century: Policy, Economy, Culture”

Nadejda Ozerova, “Nationalization Policy in Uzbekistan and Its Consequences (1917-1940)” (Kamp 女史が代読)

Russel Zanca, “Collectivization? — What Was in It for Me?”

このセッションは、Kamp 女史の率いる研究プロジェクトの成果報告を兼ねており、こうした意味で内容的にまとまりのあるセッションだった。こうした方法は、私たちが科学研究費で行う研究プロジェクトでも採用してはどうだろうか。さて、このプロジェクトは人類学と歴史学の方法を使い、ウズベキスタンの各地で農業集団化に関する聞き取り調査を行ったもので、いまや歴史と化したソ連の時代を「歴史の記憶」を用いて解明しようという注目すべき研究方法だと思う。元気一杯の Kamp 女史を中心にアメリカとウズベキスタン歴史研究所のスタッフが集まっているが、この中には最近研究テーマをナクシュバンディー教団から近現代ホラズムのカーディー文書に変えた Karimov 氏の姿もあった。彼は、堀川徹氏らの『ヒヴァのカーディー文書カタログ』にも言及した上で、文書研究と口承資料との結合の可能性を示唆した。現在歴史的なホラズム地方は、ウズベキスタン、カラカルパクスタン、トルクメニスタン3国の国境線に分割されているが、現地の人々の間には今もホラズム地方の一体性の記憶が継承されているという指摘は興味深かった。フロアからは、こうした聞き取り調査によってウズベク人研究者自身の歴史認識に変化はあったのか、という当を得た質問も飛んだ。

HC-2 Aspects of Kazakh Steppe History, 18th c. - Early 20th c.

Gulnar Kendirbai, “Tsarist Policies of Islam in the Kazakh Steppe (18th-19th Centuries)”

Allen J. Frank, “An Overview of Sufi Networks on the Kazakh Steppe: 1780-1917”

Svetlana Zavgorodnyaya, “What Was the Kazakh ‘Nomadic Elite’ in the 19th Century”

Virginia Martin, “Kazakh Sultans as Colonial Administrators: Preliminary Research on Their Power and Status, 1820s-1860s”

このセッションは、私が出席した中では今回の大会でもっともまとまりがよく、密度の濃いセッションの一つだった。前半二人はカザフ草原におけるイスラームの多様な側面を扱い、Kendirbay 報告は、エカチェリナ 2 世に始まるロシアの対イスラーム政策（ムスリム宗務協議会を軸とした制度化したイスラームの形成）が草原におけるイスラームの活性化をもたらした点やタタール人の印刷文化やジャディード知識人の夏期活動の重要性を指摘、Frank 報告は、草原に広がったヤサヴィー教団やナクシュバンディー・ムジャッディディーヤ教団のネットワークを文献史料に基づいて論じた。いずれも、カザフのイスラームを再考する必要性を示唆しているように思われる。後半の 2 本は、いずれも植民地統治下のカザフのエリートを扱い、とりわけ有名なチョカン・ワリハノフの父、チングス・ワリハノフを事例に 19 世紀カザフの政治文化を解明しようとする Martin 女史の研究は、その進展が期待される。このセッションでは、宇山智彦氏が優れたディスカッサントの役を務めたが、司会の関係で氏の的確な指摘や質問に対する十分な反応を引き出せなかったのは残念だった。全体として、このセッションからは、「ナショナル・ヒストリー」を越えてカザフ近代史の構築をめざそうとする意欲が感じられた。

HC-01 World Historical Approaches to Central Eurasian History

James Millward, “Xinjiang in World History”

Douglas Northrop, “Connections, Encounters, Disasters: Central Asian Earthquakes in Global Perspective”

Scott Levi, “The Ferghana Valley at the Crossroads of World History: The Tyrant ‘Alim Khan (r. 1798-1810)”

Victoria Clement, “Local Histories / Global Designs: Turkmen Alphabet and Language Reform, 1881-2003”

これは、最近注目を集める「ワールド・ヒストリー」の観点からの中央ユーラシア研究と銘打ち、じっさい The World History Association の後援を得ているという。こうした意味で期待して参加したのだが、個別の報告はいずれも内容が散漫で司会者の張り切りにもかかわらず、セッションとしてのまとまりを欠いたのは残念だった。中央ユーラシアを世界史の中に単純に取り込むだけでなく、「ワールド・ヒストリー」の

観点から新鮮で具体的な課題を提示するようにしなければ、このアイデアはなかなか活かされないように思われる。Levi 報告は、昨年と同じくコーカンド・ハン国の興隆を扱ったが、内容は概説風で、新味を欠いた印象は否めない。「かくも強大さを誇ったコーカンドが、なぜもろくも衰退したのか」というフロアーからの質問に答えるには、インド、ロシア、中国を結ぶ通商の問題のみならず、ハン国の内部構造をきちんとおさえる必要があるだろう。

(以上、10月15日)

PO-11 Islam and Politics

Pınar Akçalı, “Many Faces of Post-Soviet Islam in Central Asia: Blurred Boundaries, New Approaches”

Bayram Balci, “Between Sunna and Shia: Islam in Post-Soviet Azerbaijan”

Wassilios Klein, “The Relevance of the Muftis in Central Asian States of the CIS for Religious Tolerance”

このセッションはテーマの話題性から、多数の聴衆を集めたセッションの一つだった。Akçalı 報告は、現代中央アジアのイスラームを①伝統的な慣行や穏健なスーフィズムに基づいた Popular Islam、②ソ連以来のムスリム宗務局が体現する Elite Islam、③タジキスタン・イスラーム復興党に代表される Political Islam、④ウズベキスタン・イスラーム運動やヒズブッタフリールに代表される Radical Islam の4つに分類し、近年では①と②、③と④の境界線がなくなりつつあることを指摘し、Secular Islam と Unsecular Islam との対抗軸が鮮明になったと論じた。Balci 報告は、アゼルバイジャンで長く共生関係を保ってきたシーア派とスンナ派との間に、イランやアラブ諸国、トルコなど外国の影響が入ることにより、競合や対立が生じる可能性を指摘した。報告者は現在バクーで研究中で、2005年3月には国際シンポジウム報告で来日の予定。Klein 報告は、ムスリム宗務局の概説でとくに新味はなかった。なお、予定されていたタシュケント・イスラーム大学の研究者の報告は、欠席でキャンセル。以上の報告に対して敢然と批判的なコメントを放ったのがディスカッサント、インディアナ大学の N.Shahrani 教授であった。氏は、ホージャ・アフラルの政治への介入やドゥクチ・イシャーンのアンディジャン蜂起を想起すれば、スーフィズムは政治に関与せず、穏健なイスラームを体現する、などというのは間違った認識であり、現代中央アジアのイスラーム研究における問題点、すなわち現地のイスラームの内在的な理解や政治と社会のリアリティーの欠如を指摘した。たしかに、氏が高く評価する B.Babajanov 氏の研究を見れば、最初と最後の報告が色あせてしまうのは事実である。表面的な動向を追うにとどまる昨今の議論に対する手厳しい批判ともいえよう。ソ連時代の政治文化の

継続性にも目配りが必要だという指摘ももつともである。このセッションでは、ディスカッサントに学ぶことが多かった。ちなみに、最近“A Secular Islam: Nation, State, and Religion in Uzbekistan” (*International Journal of Middle East Studies*, No.35, 2003) を発表したばかりの Adeeb Khalid 氏の姿は会場には見えなかった。

HC-14 The Trajectories of Muslim Reform in Eurasia

Hisao Komatsu, “Muslim Intellectuals and Japan: A Pan-Islamist Mediator, Abdurreshid Ibrahim”

Adeeb Khalid, “Contemporary Uzbek Views of Jadidism”

Agnes Kefeli, “Traditional Primary Islamic Education and Conversion to Islam on the Middle Volga, 1800-1880”

Shawn Lyons, “Old School, New School: A Jadid Reformist’s Last Comment on Education”

このセッションは、当初予定されていたジャディード運動を再考するセッションが参加者のキャンセルのために急遽組み替えられて成立した。それでも Adeeb Khalid 氏らの努力によって、なんとかつながりのあるセッションが組めたのは幸이었다。小松報告は、1933年に再来日した後のアブデュルレシト・イブラヒムの政治的な活動と日本の対イスラーム政策との関係を扱ったが、この問題を深めるには30年代の日ソ関係を視野に収めることが必要である。Khalid 報告は、エッセイ風の語りという印象をもったが、後の話では、日本でイブラヒムとも面識のあった汎イスラーム主義のインド人革命家バラカトゥッラーに関心を持っているとのことだった。日本でもしかるべき研究の待たれるところである。Kefeli 報告は、19世紀ヴォルガ・ウラル地方における正教への改宗とイスラームへの再改宗の問題を精力的に研究している報告者の最近の成果がうかがえた。コメントの中にあつた、イスラームも正教もよく知らなかった人々の間でジャディードの作成した教科書が大きな影響力をもったという指摘は興味深い。Lyons 報告は、フィトラトの作品と教育家としての活動を概括的に扱った。氏は、アメリカでは数少ないフィトラト研究者の一人で、最近では“‘Chase away this pig from the mosque’: Eastern politics in the Indian dramas of Abdurauf Fitrat” (*Central Asian Survey*, vol.22(2/3), 2003) を発表している。

この日の午後4時から、シカゴ大学の Ronald Suny 教授が満員の講堂で“Dialectics of Empire”と題する大きなテーマの講演を行ったが、照明を落とした会場で時差の睡魔に襲われた筆者には、残念ながらほとんど記憶が残っていない。

(以上、10月16日)

PO-12 Islamism and Nationalism in Central Asia and the Caucasus

Gunes Murat Tezcur, “Whither Islamism in Iran?: Evidence on Mass Political Attitudes”

Sofie Bedford, “Islamicization in Process: Understanding Politicization of Religion in Post-Soviet Uzbekistan and Azerbaijan”

Michael Dennis, “From the Sickle to the Crescent: The Construction of Millitant Islamic Identities in Chechnya”

Nicholas Don Corbett, “Steps to Statehood: Contemporary Nationalism in Uzbekistan”

このセッションは、すべて博士論文作成前の大学院生による報告からなっていた。現地でのフィールドワークの成果報告から「構想発表」風の報告まで、報告の質は多様であり、ディスカッサントの Adeeb Khalid 氏が、あたかも大学院のゼミを仕切るかのようにコメントを行ったのが印象に残っている。中では、テヘラン市民にアンケート調査を行ってイランのイスラーム主義の行方を考察しようとした最初の報告が興味深かった。イスラーム革命後の金曜礼拝では政治的なプロパガンダが多くなった結果、真に敬虔なムスリムは、シャーの時代ほど金曜礼拝に足を運ばなくなり、むしろ家に残る傾向にある、とトルコ人の Tezcur 氏は指摘した。

SO-16 Evaluating U.S. Programs in Central Asia

Laurence Ariel Jarvik, “Teaching Business Communication in Uzbekistan: Some Lessons Learned”

Jamil Hasanli, “The Significance of the Children’s Encyclopedia in the Formation of the New World View in Azerbaijan”

Charles Krusekopf, “Expanding the Field of Mongolian Studies and a Report on the American Center for Mongolian Studies (ACMS) in Ulaanbaatar”

このセッションは、中央ユーラシアにおける米国プログラムの実践に関する評価・報告を集めたもので、こうした議論の場は日本の通常の学会ではあまり見られないと思う。ディスカッサントには、在ビシュケク米国大使館のメンバーが迎えられていた。タシュケントのエリート校、世界外交経済大学での教授経験をふまえた Jarvik 報告は、報告そのものよりも、むしろ学生ビザの発給にともなう収賄をはじめとする腐敗の構造や貧富の差の拡大を告発・批判する報告者の熱弁が印象に残った。Hasanli 報告は、全20巻の児童百科事典が、ソ連解体後の児童図書の欠を埋める役割を果たしていることを指摘したが、こうした試みは日本が行う支援にも参考になるだろう。児童に対する宗教教育は、イランからの影響に備えるためにも十全な取り組みが必要だという指摘も興味深い。なお、報告者は現職の国会議員であるとともに、冷戦期のイラン・アゼルバイジャン問題の研究者でもある。 (以上、10月17日)

以上、筆者が出席したセッションの概要と感想を記した。報告時間は一人15分であり、レジュメが配られることもないから聞く側の理解度には限界もあるが、全体として見ると、現在の中央ユーラシア研究の広がりあらためて知ることができたのは収穫だった。日本との比較で言えば、国内で開かれる研究会や学会での研究報告は、一般によく準備されており、その質も高いと言えるだろう、そうだとすれば、これらの報告が日本語の世界の中だけで完結してしまうのは、何とも惜しいと言わざるをえない。より積極的な外への発信が望まれる所以である。来年の大会は東海岸のボストン大学で開催されることになっている。

(東京大学大学院人文社会系研究科)